日本教育新聞

四国版

日本教育新聞社
〒108-8638　東京都港区白金台3-2-10
☎03（3280）7008（大代表）
郵便振替 0015-8-196500

©日本教育新聞社 2019

関西支社
〒530-0003
大阪市北区堂島２-４-27
☎06（6341）6111

ご購読申し込み ☎03（3280）7025
Eメール kodoku@kyoiku-press.co.jp
ホームページ http://www.kyoiku-press.co.jp

地域とともに育む自律性

高松市立檀紙小学校

土器づくりは粘土づくりから始める

高松市立檀紙（だんし）小学校（堺美枝校長、児童数584人）は、香川県高松市の南西部の檀紙町、御厩町（みまやちょう）、中間町（なかつまちょう）の3町からなる田園地帯に位置している。この地域は、国道11号線や四国横断道の高松西インターチェンジがあり、高松市の西の玄関口、陸上交通の要所として重要な役割を果たしている。

この校区において、平安時代ころから良質の和紙が生産されており、特に「檀紙」は最も良い紙とされていた。檀紙は檀（まゆみ）の木の樹皮を原料とした紙と言われたり、高級和紙に付けられた名称であるとも言われたりしている。この校区には、「檀紙」とともに「紙漉」（かみすき）の地名もあり、当時を偲ぶことができる。

また、この地域の伝統産業である御厩焼き（みまやき）は、江戸時代中期以降、この地域から出土する良質の陶土をもとに、生活用品を生産する窯業地として発展を遂げてきたが、近代化の波に押され、現在に至っている。

同校は明治20年の創立以来、132年目を迎える。豊かな田園地帯であるこの地域は近年、土地開発が進み、平成15年度からは児童数は毎年増加の一途をたどっているが、この校区は、従来から地域の中で次世代を担う子どもたちを育てるという意識が根付いており、地域の人たちは学校教育に非常に熱心で、協力的である。

特に、地域の伝統産業である御厩焼きの体験学習は、これまでの300年の技術の継承を踏まえ、16年3月、学校、地域、保護者、地域が中心となり、1年半にわたるボランティア活動によって校庭に平窯が築かれ、「檀千人がま」と命名され、18年に初めての、焼成を成し遂げた。

この地域の伝統文化である「みまや焼き」の体験学習を通して、児童と保護者、地域住民がともに活動することにより、地域の伝統文化を理解し、地域に対する誇りと地域愛の心を育むとともに、将来、この地域を支える後継者の育成につながるものと考えている。

この体験学習は、保護者や地域の方々の協力を得て、「千年の土器づくり」に向けて、粘土づくり体験から始め、道具作り、親子による千人の土器づくり、千人窯焚き、夏祭りでの展示という体験工程で、毎年度、実施している。

そして、これからの子どもたちは、情報化の進展により、幅広い知識と柔軟な思考力により的確に判断することや、多様な価値観をもつ他者との交流を図りながら課題を解決すること等が求められていることから、子どもたちの素直で物事に懸命に取り組む特性を生かしながら、自ら考え、行動することができるよう、自律性の支援の考え方を取り入れた指導に力を入れている。

自律性支援を意識した教師の働きかけで、子どもたちの主体性や学ぶ意欲を高めることができるのではないかと考え、日々の学習指導に取り組んでいる。そのため、自律性支援を意識した授業展開の工夫をすること、読解力の育成を目指した学習課題の設定や発問の工夫を行うこと、対話的な学びの有効性が見られる学習形態等の工夫等に取り組んでいる。

また、同校では、人との関わりの大切さや集団の中での自己の在り方や生かし方を学ぶ力を身に付けるため、子どもたちが自ら実践内容を考案して取り組むボランティア活動に全校児童が取り組んでいる。

ボランティア活動の内容は、子どもたちが自分たちで考え、意見を出し合って、1年生から6年生まで全員が参加して、計画的に活動している。

今年度取り組んでいるのは、「挨拶（あいさつ）列車」、「フラワー隊」、「石ひろい」、「アルミ缶つぶし」、「体育館ぴかぴか隊」などがある。

これらの取り組みは、高松市全幼稚園・小・中学校で取り組んでいる「子どもの成長を願う6つの活動」である、「スマイル挨拶運動」、「ぴかぴかデー」などの活動の一環としても積極的に取り組んでいる。

このように檀紙小学校では、地域の中の小学校として、地域の方々に支えられながら、郷土「檀紙」、ひいては「高松」に対する誇りと、この郷土に生きている喜びを感じられるような教育を積極的に実践しており、今後の「まゆみっ子」たちの成長に期待したい。

教育雑感

コミュニケーションって？

以前は、体調の悪そうな人に「大丈夫ですか？」と聞き、その答えが「大丈夫です」であった。また「この計画で時間と予算は大丈夫だろうか？」、との質問の返答として答えられるような使い方をしていた。しかし、最近、「これ食べますか？」の答えとして「大丈夫です」と答える。食べるのか、食べないのか、それともアレルギーなど無くて食べることができるのか、訳が分からなくなる。

最近、こんな使い方をよく耳にする。そう言うと、「だいぶ前から使っているよ」と言われそうである。それにしても、何が大丈夫なのかと思う。便利な言葉ではある。否定する時も、肯定する時も聞く方が忖度すれば、それなりに様子が理解できる。さらに相手の表情を見ていればおぼろげだったものが、なるほどと思うようにもなる。しかし、なにゆえこの人たちに忖度しなければならないのか、とも思う。

理解してやろうとすることは必要であると思う。上から目線で言わせてもらえば、豊かな表現力を持たない彼らの思いをも理解してやることで、彼らの居場所も少し広くなるのではないかと思う。しかし、自らが作る人間関係を少しでもよくするためにも、周りに自分のことを分かってもらうためにも、豊かな表現力を身に付けることが必要であると思う。その第一歩として何が大丈夫なのか説明できるようになってもらえればと思う。

そういったことで、「大丈夫です」という言葉を聞いたときは、時折は「なにが大丈夫なの？」と、聞き返すことにしている。そう聞いてもさらに「大丈夫です」と繰り返す人たちもいる。適当にあしらわれているとしか思えない。あしらわれないような実力と存在を自分につけなければならないとも思う。

人との会話の中で、気になることがもう1つある。「何でもありません」といった言葉を聞くことである。人の行動は何らかの理由があって成り立つのであって、何にも理由がないのに人間が動く事はありえない。ちょっとした理由でも何かそこに存在する。この言葉を聞くとその言葉の裏にあるものをいろいろと想像してしまう。

「あなたには関係ないことだから知らなくていい」、「あなたは知らない方がよい。知ってしまうと重荷を背負うことになる」といった午後のミステリーさながらの深い理由を思ってみたり、「一度話しだしたら、知られたくないことまで言わなくてはいけなくなる」と人間関係を疑ってみたり、けれどもほとんどは、「たいしたことじゃないんだからどうでもいいんじゃない」「言うのがめんどくさい」といったことだったりする。

いずれにせよ人間関係をつまづかせる小石となる要素をもっている。「何でもありません」といった言葉の代わりに、思いやりを基底にもった相手が納得する言葉を紡ぎ出せるボキャブラリーと話術を身に付けたいものである。（浦辻洋一・四国版編集委員）